

氏 名	やなぎ た よし のぶ 柳 田 芳 伸
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	論 経 博 第 318 号
学位授与の日付	平 成 18 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	マルサス勤労階級論の展開 ——近代イングランドの社会・経済の分析を通して——

論文調査委員	(主 査) 教 授 田 中 秀 夫	教 授 八 木 紀 一 郎	教 授 根 井 雅 弘
--------	----------------------	---------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は古典派経済学者として知られるトマス・ロバート・マルサスの経済思想を対象とする学史的な研究であり、とりわけ「勤労階級」の概念を焦点として、一点突破をはかった労作である。「勤労階級」について言及したマルサスの諸著作、文章を徹底的に調べ上げて、マルサスの勤労階級像を明確にするとともに、サー・ジェームズ・ステュアート、リチャード・ジョーンズ、ヘンリ・ジョージとの関係を解明することによって、学史的に位置付けなおすという作業もなされている。

序論は「本書の基本視角」を説く。マルサスは人口原理に立脚して生存費賃金説を主張した低賃金論者であるという通説は、マルサスの正確な理解ではなく、実はマルサスは下層階級の上昇を可能とみなした高賃金論者でもあったことを主張することが本書の課題であることを宣言する。すなわち、下層階級は生来の怠惰を勤労によって克服する勤労階級、すなわち自身と家族を養うという願望と、生活の境遇を改善しようとする願望とによって、勤労と熟練を身に付け、生産性を高め、独立・節儉・まじめ・清潔などの徳をも涵養して「愉楽の標準」を引き上げる勤労階級と、怠惰で放蕩な習慣を克服できず、向こう見ずな早期の結婚をして、貧窮に甘んじてしまう最下層階級に分化していくという歴史的な展望をもっていた。マルサスは勤労階級が上昇し、中流階級になることを願ってやまなかった。マルサスは健康で有徳かつ幸福な人口の緩慢な増加を願っていたことはボナーがつとに指摘し、今では定説であるが、この研究では、その人口の本体を勤労階級に求めて、その理由を解明する。この視角は歴史学派マルサスという見解や、マルサスの貢献を理論以上に応用経済学や経済史に求める見解と親和的である。

このような問題設定から、まず第1章では「地主以外の有効需要者」として中流階級、とりわけ下層階級から上昇してくる勤労階級に注目する。著者はカフーンの年収別階級構成を参考にして、マルサスの階級区分を詳細に検討して、マルサスは年収50ポンドから1000ポンドの階級を中流とし、彼らを重視したと主張する。

第2章「マルサスの勤労階級論」はまさに勤労階級のインダストリに注目するとともに、常用雇用制を中核とする勤労階級の奢侈的消費にも注目することによって、マルサスの勤労階級論が生産と消費の両面からなるものであるという分析を提出する。しかも、『人口論』初版にないインダストリ論がその後の著作でどのように登場し、発展させられるか、また勤労階級の奢侈的消費に注目するマルサスの見解が、ナポレオン戦争後の不況を奢侈の大衆化によって克服するという時局的要請とも合致していたことを論証する。

第3章「マルサスの余暇論」では、マルサスは、下層階級のうち常用雇用によって一定の勤労と熟練を身につけた勤労階級は余暇を楽しむことができるようになるが、最下層階級は怠惰の習慣を克服できないと考えたと説く。それに対して第4章「マルサスの健康論」は医師でもあったマルサスが健康の増進を重視した思想家であることを抉り出す。ショートやプライスがマルサス以前に健康に注目したが、かれらの議論を吸収しながら、マルサスは工場法やチャドウィックの公衆衛生運動を先取りした主張を行っていた。通風のよい住居、栄養のある新鮮な食物、清潔さを重視するとともに、健康な農業労働と不健全な製造業労働を対置する労働科学の芽生えもまたマルサスにはあった。

第6章ではマルサスの租税論が取り上げられ、対仏戦争期とその後の財政問題をマルサスがどのように認識していたかを

詳細に分析している。成人男子の6分の1を動員した対仏戦争は公債に依存する財政拡大を必然化していたが、民政費は微増にとどまった。マルサスは防衛戦争を容認したものの、戦争と過大な支出を避けることを政府の義務として説いた。戦争は軍需を生み、経済の活性化につながったという認識をもってはいたが、マルサスは社会にとってはこのような富は無いほうがよかったという認識を示した。マルサスは勤労が着実に発展していくことと、予防的妨げによる人口の制限を社会認識の基本としていたから、資本家への課税、労働者の必需品への課税を回避し、上流階級の奢侈的消費に課税することを容認した。その根底には土地単一税というエコノミストから継承した見解があった。したがって、マルサスは救貧法については漸次廃止することを主張したが、それは労働者階級の上昇という展望に基づくものであった。

第7章は後期マルサスの貿易論を扱う。ナポレオン戦争期のイングランドの貿易をマルサスは軍需にも支えられて順調に成長していったと主張しているが、戦後は需要の縮小によって景気が後退した。マルサスはアメリカの保護関税政策には自由貿易で対応できるとし、フランスの絹織物輸入解禁には保護関税政策を主張するという具合に異なった政策を説いた。マルサスは奴隷貿易廃止に賛成したものの、植民地貿易の開放までは擁護せず、むしろ強化を主張した。マルサスは対後進資本主義国との貿易では農業保護主義を説いたが、可能な範囲でリカード的な自由貿易を認めていた。ここでは、とりわけインド植民地の東インド会社の支配後の経営に、高等文官の養成を通して深い関与をした事情が注目されている。

第7章ではJ・ステュアートとの関係（勤労階級概念の比較、階級交代論の源泉としてのステュアート）、第8章ではR・ジョーンズとの関係（慎慮的抑制から自発的抑制へ、その他）、第9章ではH・ジョージとの関係（ジョージによる愉楽の理論批判、その他）が扱われ、歴史学派的マルサスが学史に位置づけられる。そして以上の分析を補論、生産的階級としてのマルサス勤労階級論が補足している。その主張はマルサスの勤労階級は生産的階級として富を生産し、資本家の利潤にも貢献するというものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、リカードと激しい論争を繰り広げつつ、資本主義の本格的な確立期に古典派経済学の形成に寄与したトマス・ロバート・マルサスにおける経済思想を、とりわけ「勤労階級」の概念を焦点として、読み抜こうと意図して遂行された独創的な力作である。要旨に述べたようにマルサスの諸著作に散見される「勤労階級」についての言及を徹底的に調べ上げて、勤労階級概念の内実を明確にしている。またサー・ジェイムズ・ステュアート、リチャード・ジョーンズ、ヘンリ・ジョージ等との関係からもマルサスの勤労階級像の形成と継承・批判を描くことによって新しい視点からマルサスを経済学の歴史のなかに位置づける試みもなされた。このような特徴をもつ研究であるが、その学史・思想史への貢献は以下の点に求められる。

第1に、マルサスについては、地主階級の利益を代弁する保守的な経済学者として位置づけるマルクス以来の有力な通説があるが、著者は、ウインチやプレンなどの、現代の英米の経済学史家のマルサス理解を継承しつつ、勤労階級の幸福を可能にする社会システムとして資本主義を分析した思想家としてマルサスを評価し、マルサスの勤労階級概念の分析（有効需要者、勤労階級、余暇論、健康論、生産的階級論）を通して、マルサスの学史・思想史研究をさらに深めるとともに、マルサスの業績の一端を明確にした。

第2に、マルサスの理論は、資本主義が自動的に勤労階級の「愉楽の標準」を高度化するメカニズムをもっているという自動的必然論ではなく、マルサスはあくまでも勤労階級がより快適な、より人間的な暮らしをしたいと望む、すなわち「愉楽の標準」の上昇を望むことから、自助努力を通して、資本主義社会の内部で上昇する可能性をもつと展望したのであって、決定論はとらなかったということを明らかにした。そのような意味でマルサスは主意主義者であったということが一貫して繰り返して説得的に論証されている。

第3に、このような分析を支えるのは、一方ではマルサスの「勤労階級」という用語を徹底的に追いかけて、調べ、読み込むという努力であるが、他方ではマルサスを歴史的な文脈と背景に即して理解しようとする方法であって、マルサスを解釈する背景として描かれた18世紀末から19世紀前半（フランス革命期から産業革命・奴隷貿易廃止、植民地支配、帝国とチャーティスト運動の時代）にかけてのイングランドの国内的・対外的経済状況の分析は詳細を極めており、実証的経済史的成果としても参照に値する。すなわち、ここでは、経済学史は経済史との試行錯誤的往復でなければならないという立場の一

つの範例が実現されており、それが勤労階級論の分析をいっそう明確で説得力あるものとしている。

第4に、租税論、貿易論についてもマルサスの時論的発言の複雑なコンテキストを探って詳細な分析を行っており、その分析を通してマルサスの経済理論・政策論の基本的な理論構造（農業保護主義と両立する限りの自由貿易論という二重性）を従来以上に明確にした点もまた重要な成果である。

第5に、第3点と関連するが、マルサスを歴史学派として読むという可能性を開いたことも評価される。

しかしながら、他方、本論文には、以下のような限界もある。

第1に、研究テーマをマルサスの勤労階級論に絞ったために、マルサスの全体像が見えなくなっている。マルサスの多面的な相貌を統合して歴史に位置づける総論がほしい。著者はマルサスをカントリ（反政府派）として位置づけつつ、フォックス派ウィッグとは言えないということまで述べているが、それだけでは十分な位置づけとは言えないであろう。むしろ、ウォーターマンのように「キリスト教経済学」というカテゴリに位置づけたほうがマルサスの像は明確になりはしないか。実際、著者の力説するマルサスの勤労階級論は、聖職者であったマルサスの神学と矛盾するものではないであろうし、その主意主義的な側面は、まさにキリスト教経済学を髣髴とさせるものとみなせるであろう。さらに現在急速に研究が進んでいる哲学的急進派との関係をどこかで描いてほしかった。

第2に、マルサスの勤労階級像、自己努力する人間像が、どこから出てきたかについての思想史的コンテキストの追究がいまだ不十分に思われる。スミスの利己心を動機とする改善性向をもった人間像の継承なのか、キリスト教のどのような流派の神学と関連があるのか、ステュアートの勤労階級論の影響を重視しすぎではないかといった疑問が残る。

第3に、学史的にはリカードとの比較が弱く、マーシャルは少し登場するけれども、総じてケンブリッジ学派の経済学にどのように継承されるのか、されないのかが不分明なままに終わっている点も、物足りない。理論史で通説を批判して新説を出すことは困難なことであるが、またジョーンズ、ジョージとの関連の考察にしてもメリットは否定しないが、安全策をとりすぎているという印象を否めない。さらにまた考察対象を資本家像、地主像に絞って同じような徹底的な分析を行ったらどうなるだろうかという疑問もある。

とはいえ、本論文は前述のような優れた貢献をもった独創的な研究であり、博士（経済学）の学位にふさわしい業績である。なお、平成17年11月9日、論文内容に関し試問を行った結果、合格と認めた。